



やぐら通信

～ひとみキラキラ豊かな心と体の矢倉っ子～

親離れ、子離れ

今は寝たきりとなった母を見舞った。滋賀へ帰るとき、「それじゃあ、行ってくるから。」と声をかけると、「どうしたんや、もうええから、休んどき。」という。久しぶりに田舎に帰り、いつもと違うゆったりした時間を過ごした後に、明日から仕事だ、がんばるぞと気合いを入れようとする私の顔つきが、これではいかんと思ったからだろうか。そういえば子どもの頃、なんとなくこうしたやりとりをしたものだ。「なにかあったのか」とも尋ねず、「そこのお膳におやつを置いてあるから、ゆっくりしい」と声だけかけてくれ、いつもと同じように振る舞ってくれることがたびたびあった。自分なりに整理を付けるチャンスが与えられ、あれこれ言わずにいてくれた。子どもであっても一人の人間として扱い、プライドを傷つけないようにしておいてくれたのだ。大抵、しばらくして、「さっきの顔つきはおまえらしくなかった・・・」と、立ちかえるべき大切なこと、生き方の姿勢といったことについて、時間をかけて話してくれた。時には、「ちゃんと神さまがみてくれてはるから」と一言だけ告げることもあった。そんなときは、本人に任せるしかないものの、よほど心配だったに違いない。

ずいぶん小さかった頃は、これはこうするものだと言われた記憶がかすかにある。時には、それはダメだと決して許してもらえないことも確かにあった。しかし、いつまでもあれこれ親に口出ししてほしくない自分としては、何かにつけて、自分でやるからとダダをこねたことも記憶している。こうして親達は常日頃から目の前の子どものふるまい、ものの言い方を気にかけて、少しずつ一人前の人間として扱うようになっていったのだろう。

教師になりたての頃、父が親子の問題、子育てについてしみじみと語ったことがあった。親というものは、いつまでたっても子どものことが気になって仕方がないものであり、つらがついているときは、代わってやりたいと心の底から思ってしまう。それは、大人になり、働き出した我が子を見ても、ついそうした思いにとらわれるとのこと。そもそも大人になるとか、成長するとかということは、親の手から離れていくことであるにもかかわらず、それが了解できず、つい、口うるさく言ってしまうのだと。さらに、親も親として育たねば、子どもを不幸にしてしまうものだ。だから、親と子と双方が大切にできること、基づくべきこと、こうしたことを小さいときから一緒にしっかりと育てていくようにと努めてきたのだが・・・と語り、黙りこくった。

いつまで経っても親に心配をかけ続けさせてしまう、これが子どもというものだろうか。